

「近代東アジア経済・文化の発展と交流」を特集するにあたって

金丸 裕一

ここに掲載する一連の論文は、既に本誌第13巻第4号（2002年2月発行）において発表された特集たる環「東中国海」経済文化研究の続編であり、第二部はタイトルを「近代東アジア経済・文化の発展と交流」と設定した。98～00年度に進められた国際言語文化研究所プロジェクト研究（B I、代表・文学部教授・北村稔）の前史・梗概、及び具体的な展開については、既に経済学部教授・斎藤敏康による簡にして要を得た紹介があるため、重複の愚は避けたい。ここでは、本号に所収の論文にのみ限定して、概要を紹介するとともに、われわれの意図するところを整理しておきたいと考える。

経済史関係の論文は、一読して判る通り力作揃いである。劉石吉論文に代表される、近代「開港場」経済が中国伝統社会に与えた影響は限定的であったという理論的な提起に加えて、本特集では多くの実証研究が精彩を放っていると思ふ。陳慈玉論文において提起された諸点は、研究史的にも成果が豊富とはいいがたい中国炭鉱業史の新見解であるとともに、20世紀前半の日中経済関係史に対しても、多くの示唆を与える内容であると思ふ。また、新進気鋭の研究者による成果である李培徳論文・陳計堯論文・千葉正史論文においては、清末から民国時期にかけての具体像を通じて、近代中国経済のあり方が、様々な角度から解明された。特に、日本近代史を専攻している方々に、是非とも参照していただきたいと願っている。

もうひとつの柱である文化史関係も、多彩な成果を取録することができた。張力論文は、ここ10年以上の間、めざましい発展を遂げている台湾のオーラル・ヒストリーに関する有益な概観であり、また山腰敏寛論文は、日米による中国における宣伝戦という視角から五四運動時期を考察した、新しいタイプの「関係史」の登場であると評価できるだろう。

また金丸裕一論文においても、日中戦争研究をめぐる「誤解」の実態の一端が追究された。許金生論文は、現代における言語の主題を扱った、本号中では多少異色の研究である。ここでは日中両国語の比較という角度から、程度補語文が未来形を表現することができるという、新しい見方が提示されており、語学研究・教育を専攻される方々からの批評を期待したい。

ここで、編集にあたった立場から、今回の特集号の「個性」を提起したいと思う。執筆を依頼した海外の研究者は、実は多くが立命館大学と姉妹関係を持つ機関に所属される方々である。学生次元における交流は、本学の国際化政策に支えられて、近年とみに豊富な内容となっているようだ。しかし、はたして研究面における実質的な関係がどこまで深まっているのかといった問題は、交換留学などと比較すると、なかなか目に触れる機会は少なかったかと思われる。その意味において今回の特集号は、研究者次元での交流が進展すると、どのような成果を生み出すことが可能になるのかを、極めて雄弁に物語る試みといえるだろう。

また、平素は高等学校において教鞭をとられている方にも、執筆をお願いした。高等教育と中等教育との間の様々な交流は、今後ますます密接になることが期待され、例えば附属校の先生方との共同研究なども、今後は積極的に志向されるべきであろう。こういった思いで作業を進めていったが、かかる主旨に賛同していただければ幸甚である。

最後に、論文の日本語訳を引き受けて下さった、星野多佳子・三品英憲・齋藤真司・大沢武彦の各氏に対して、その労力に感謝申し上げるとともに、終始一貫して丁寧に編集作業をリードして下さった本学国際言語文化研究所の伊藤光春・中橋直子両氏に対しても、この場をかりてお礼を申し述べたい。